

◎「暑い 太陽がギラギラ まだ 朝の 8 時なのに」7 月に入ってすぐだ。梅雨があっという間に終わり、この 2.3 日猛暑日が続いている。アトリエにいて、窓の外は太陽がギラギラなのに、アトリエの中が薄暗い、これはなに？なんでだろうと先日から思っていた。そんなことを思いながら、「あ そうか そういうことか」と膝を叩いて頭の中で解決をした。これはだねえ、冬の季節は太陽の光が窓からアトリエの中にたくさん入ってくる、アトリエの床が明るいので、アトリエ中が明るいのだ。それに比べ夏の太陽は真上から、窓から光が差し込んでこない。夏の光はギラギラで暑い、このギラギラで錯覚してしまうが、ギラギラは中に入っていない、光が中に入っていないので、外のギラギラに反比例して中が暗いのである。これが原因なんだなとひとり納得。いや待てよ、この反比例は、抒情的な余計な感情が入っているかもと訂正。

◎3 日ほど前に琵琶湖でキャンプをした。足イタがまだ完治していない、山はまだ無理をしない方がいいということでキャンプだけを楽しんだ。夕方に、「このあたりでどうかな」と草の広がる場所を見つけた。草むらがある駐車場の看板に、「キャンプも テント泊もいい 火も直火以外はいい」と書いてある、先客が 2.3 組いる、「ここはいいねえ 便利な場所で テント泊ができるとは・・・」琵琶湖の水が出ていく瀬田、そこにかかる近江大橋、食材を近江大橋を渡ったところのイオンモール草津で買い、湖岸道路をちょっと北上したあたりで車を止めた。番匠・三宅・岡村のジジイ 3 人である。

◎ジジイ 3 人で、ビールを、ワインを、肉を、野菜を喰い、しゃべった。暑さは大阪と変わらない、テント内に蚊取り線香を焚き、網戸のままで寝た。2.3 人で楽しむ若者たちが何組か、一人でポッチキャンプを楽しんでいる中年、熟年も 2.3 組いた。朝ひとりで散歩に出た、琵琶湖のそばを歩いたが、琵琶湖に注ぐ水門があるところから山の方に向かった。「おお内湖がある」鈴鹿の方から陽が出てきて内湖に反射し、太陽が二つも四つも見える。琵琶湖も、琵琶湖に注ぐ幾多の川も、全部合わせて“淀川水系”だというらしい。比叡山が見える、小さく比良山が見える、近江富士が見えるが伊吹や鈴鹿の山々は霞んで見えない。

◎テント場でのキャンプも何度か経験があるが、山から下りてテントを張って寝るためのキャンプだった。まだ山に行っていない若いころは、キャンプに BBQ なんてことも何度かしたことがある。山のテントはザックに一式を詰め込んで登っていく。80 リッターのザックは 20~30 キロぐらい、腰に肩に荷が食い込み、はあはあ～ぜえぜえ～歩いていた。テント場に着いた、このあとが楽しかった。ショバ代を払い、テントを立て、荷を入れ、食事の用意、持参のアルコールを飲んでいた。

◎「昨夜は 叩きつけるような雨が 降っていた 雨音で目覚めた」これは何日の IC レコーダーなのかかわからないが、たぶん一週間前ぐらいだったと思う。真夏日が続きだしてまだ、2.3 日ぐらいかな、今日あたりからやっとこの暑さが多少は慣れてきた、慣れてきたとはいえ、だるい眠い、アトリエの床にタオルケットを敷き、ひっくり返っている時間が長い。

◎足イタもまだ違和感が残っている。ほぼ一か月経ったぐらいかな、裸足でアトリエにいるかぎりはまったく問題ない、雪駄か下駄を買おうかなと思ったが、下駄箱に鎮座していた上等スリッパがちょうどいい、これを履いて 10 分ぐらい歩くのもまったく違和感がない。ぶかぶかのボロ運動靴で河原を走っているが、日々違和感が薄れていっている。問題は、登山靴であり、新しい運動靴である。番匠さんもほぼ同じ時期に、「左足の 爪が 全部黒くなった 急に靴が あわなくなった」と黒くなった爪を見せてくれた。オレほどは重症ではないようだ。ただ同年輩の人が、同じような故障、「くつが あわない」てなことが流行りだしたのでは洒落にならない。早く山を歩きたい限りである。

三浦祐之著<出雲神話と出雲世界>

◎先生は出雲がお好きだ、「なにオ・・ナマ言ってんじゃないよ・・」とおしかりを受けそうだが、オレもつられて、出雲のことが気になって、というわけで出雲の話から。これもまたオレの私見だけれど、「古事記は 当時の口承 伝承 歌 なんでもござれ 載せたのでは」とは言い過ぎかもしれないが、ヤマトというオーナーは居るとしても、古事記は当時において、聞くこと見ることなんでもござれ集めて載せたのではないのかな。つじつま合わせに時間の序列は多少考慮したとしても、あれほどの膨大な資料が載った本は、というより、あの当時に在ったものを全部載せたかな、とにかく素晴らしいではないかと思う。

◎先生弁：国家の側に立つのではなく、文字世界だけに立脚するのでもなく、古代の日本列島に生きる人々を見いだしてみたい。古事記を完結した作品として享受するのではなく、古事記という作品を突き抜けた先にある古代の表現やその背景を読みぬきたい。

◎この話、縄文学者が聞いたら涙して喜び悔しがる、「おまえには 古事記がある 我々には 土器と土偶しかない 文字が欲しい・・表現された物さえあれば・・」縄文の先生方が、土器や土偶を見て、縄文人の深層世界に入り込んでいる。「この模様は これを表し こういうことを言っている」と何度も諭されても、絵を描いているオレが、「この模様 この絵 この顔・・それがほんとうの そう言っているのかなあ それを表しているのかなあ・・」と納得できないことが多々ある。

◎例えば火焰土器と呼ばれる縄文土器、なんといってもすごい、あれを一万年前の土人のような縄文人が造った。多少粘土を扱ったことがあるので、工程は想像つく。彼らも土器造りに慣れてきて、どこの土がよくなじむか知っていたはず。土を集め、水をたして粘土を作る、粘土をこねる。紐状にして重ねたのか、板状にして貼り合わせていったのか、乾けば縮むことを計算して2割増しの大きさの物を創る。ここからが縄文君の腕の見せどころ、棒やら縄やら貝殻なんかで表面の肌具合を作っていく。すごいのは造形の数々、顔があったり紅蓮があったり、流れがあったり刺があったり、これらの造形の面白さはとにかくすごい、これが死の世界、これが宇宙、とは思いたくない。

◎先生弁：なぜ古事記は、出雲の神々の系譜や葦原中つ国平定以前の出雲の神々の活躍を延々と語るのでしょうか。日本書記のように、出雲系の系譜や神話をすべて無視しても、天皇家の歴史を叙述することはできるのです。どのように読んでみても、出雲神話と出雲の神々系譜とを用いて古事記が語ろうとしたのは、出雲世界の強さであり、最初の地上の支配者としての出雲の王の物語だと見えてしまいます。

◎出雲神話の復習。1) イザナミとイザナキが結婚して大地や神を産む。イザナミの死とイザナキの黄泉の国往還。2) イザナキの禊で(イザナキの腐乱死体を見てしまった、穢れへの禊)、日の神(アマテラス)・月の神・スサノオを産む。スサノオはイザナキの命に背き根の国へ追放される。スサノオは根の国に行く前に、高天原の姉の所に行き、ウケヒ生みと岩や神話を経て、天上から追放される。

◎出雲神話の始まり。1) スサノオは出雲の国に降り、ヤマタノオロチを退治。クシナダヒメと結婚し、オオナムチ(オオクニヌシ)を産んで根の国にいった。五穀の起源。オオナムチとイナバノシロウサギ。オオナムチと八十神。オオナムチが根の堅洲国訪問。オオナムチがスセリビメと結ばれる。オオナムチが葦原中つ国統一。ヤチホコ(オオクニヌシ)がヌナカヒメに求婚。スセリビメの嫉妬と大団円。オオクニヌシの国統一が始まる。アマテラスが地上征服宣言。オオクニヌシの服属と誓い。このあと天孫降臨に続く。

三浦祐之著<出雲神話と出雲世界>

◎古事記の出雲神話は、スサノオが地上に降りてから、オオクニヌシがタケミカヅチに服属の誓いを立てるまでの話。出雲の神々の冒険と服属まで。

◎一度目は父のイザナキから、「出ていけ～」二度目の追放はアマテラスと天上の神々から、「出ていけ～」さまようスサノオは出雲に行き着く前にオホゲツヒメに出会う。

◎スサノウが何処でオホゲツヒメに出会ったのか。日本書記ではスサノウは新羅に立ち寄ったとも書かれている。

◎先生：オホゲツヒメは海のかなたにある根源世界のようなところに住んでいた。オホゲツヒメは身体のあらゆる穴から、美味しいものを次々出した。混沌とした根源の力を秘めた女神のイメージがある。混沌の女神の死が、秩序ある生産へと移行する。採集から栽培へ、縄文的な女神の死が弥生的生産、栽培へと移行する。

◎また、食べ物をオホゲツヒメに乞うた。するとオホゲツヒメは、鼻や口、また尻からも、くさぐさのおいしい食べ物を取り出して、いろいろ作りととのえてもてなしたが、その時、そのしわざを覗き見ていたスサノオは、わざと穢して奉（たてまつる）のだと思い、すぐさまオホゲツヒメを切り殺した。すると、殺された神の身体に次々生まれる物あり、頭には蚕が生まれ、二つの目には稲の種が生まれ、二つの耳には粟が生まれ、鼻には小豆が生まれ、陰（ほと）には麦が生まれ、尻には大豆が生まれた。そこで、カムムスヒの御祖（みおや）が、これを取らせて種となした。（カムムスヒは出雲の祖神、スサノオに種を渡した。）

◎さて、遠ざけられ追われて、出雲の国の肥の河のほとりの鳥髪というところに降りた。この時、箸がこの川を下って来た。それでスサノオは、人がこの河上に住んでおると思うて、求め上がっていくと、老いた男と老いた女の二人がおり、乙女を中において泣いていた。

そこで、「お前たちはだれだ」と尋ねになると、その老いた男が答えて、「私は国つ神オホヤマツミの子です わたしの名は アシナヅチ といい 妻の名は テナヅチ といい むすめのなは クシナダヒメ といいます」また問うて、「お前が 哭くゆえはなににか」答えて、「私の娘は もとは八人いました そこに コシノヤマタノオロチが 年ごとに来て喰ってしまいました いままた そやつが来るときなので 泣いています」すると尋ねて、そやつの姿はどんなか」答えて、「その目はアカカガチ（売れた酸漿ほおずき）のごとくで からだ一つに 八つの頭と八つの尾があります またそのからだには コケやヒノキやスギが生え その長さは谷を八つ、尾根を八つも渡るほどで、その腹を見ると、いつもあちこちで血で爛れています」と申し上げた。そこでスサノオはその翁に仰せになり、「この お前の娘は わしに奉（たてまつ）るか」というと、答えて、「恐れ多いことですが お名前もわかりません」と申し上げる。すると答えて、「われは アマテラスの伊呂勢（いろせ：母を同じくする兄弟）である そして今まさに 天下ります」と名乗られた。すると、アシナヅチとテナヅチが、「そのようなお方とは恐れ多い 奉ります」と申し上げた。

そこでスサノオはすぐさま、その童女を呪力ある爪櫛（つまぐし）に変えて、おのれのミズラに挿し、その両親に告げて、「お前たちは 八塩折（やしおおり：何度も醸した強い酒）の酒を造り また垣を作り回らし その垣に 八つの門を作り 門ごとに八つの棧敷を設け その棧敷ごとに酒船を置き 船ごとに八塩折の酒を盛り上げて待て」と教えた。<略>オロチは現れ、八つの頭からそれぞれ強い酒を飲んで寝てしまった。スサノオは剣を抜き、その蛇を切り刻んだ。

さて、そ奴の中のあたりの尾を切ったとき、御刃（みはかし）の刃が欠けた。それで、あやしいと思い御刃の先でその尾を刺し割いてみると、都牟刈（つむがり??）の太刀が出てきた。

アマテラスに献上したのが、草那藝（くさなぎ）の太刀である。

三浦祐之著<出雲神話と出雲世界>

◎オロチの正式名称は：高志之八俣遠呂智：コシノヤマタノヲロチ ここにも高志：越が出てくる。高志は北陸四県<新潟・富山・石川・福井>近代の越後・越中・越前のことだ。日本書記では「越」古事記では「高志」出雲風土記では「高志：古志」と記されている。出雲の側から見ると、もっとも気になる存在、恐ろしく野蛮な世界であるとともに羨望すべき世界でもあるという複雑な心情をもよおす世界であった。

◎古事記のヲロチは暴漢ではない。毎年ヲロチを祀り娘を差しだすだけ。食べるという消費関係。それに対しスサノオは、「娘をくれれば ヲロチを退治してやる」という。

◎スサノオは結婚する（喰う）ことによって子を産む。スサノオがオホゲツヒメを殺害してカムムスヒを経由して五穀の種を得た。スサノオはクシナダヒメと結婚して稲作を始める、稲作の起源神話である。日本書記では、稲作は天孫降臨のあとだ。アマテラスが、「私が 高天が原で育てている 斎庭（ゆにわ）の穂（いなば）をわが子に託そう」といって、稲穂をニニギらに託した。

◎ヲロチ退治の話：酒を飲ませて眠り込んだ怪物を斬り殺してしまう。怪物はまんまと計略に嵌まり、英雄の知恵がいかに発揮される。このパターンはユーラシア大陸全般に広がっている話だ。

◎うかつにも酒を飲まされ不覚を取る。ヨーロッパ人がネイティブアメリカンを殺す、和人がアイヌを殺す、卑怯な行為だが、ヲロチ退治の場合は知恵が称賛される。

◎草薙の剣：三種の神器：ヲロチ退治神話で、最後に尾から草薙の剣が出てくる。天皇家の三種の神器は、この剣と、鏡と玉である。天孫降臨の時にニニギが地上に持ってきた。剣と鏡は青銅製で弥生時代のものだ。ヒスイの玉は縄文時代の呪具である。

◎さてヲロチを退治したスサノオは、約束通りクシナダヒメを手に入れ結婚することになる。そこでスサノオは、宮を作るにふさわしいところを出雲の国に探し求めた。そして、須賀というところに至りつくと、「われはここに来て 心すがすがしくなったことよ」と仰せになり、そこに宮を作って住まわれた。それゆえ、そこを、今に至るまで須賀と呼ぶ。この大神がはじめて須賀の宮を作ったとき、そこに、おのずと雲が湧きたちのぼってきた。そこでスサノオは歌をおつくりになった。

やくもたついてもやへがき	八重に雲のわき立つ出雲の八重の垣よ
妻ごみにやへがきつくる	共寝に妻を籠める八重の垣を作る
そのやへがきを	その素晴らしい八重の垣よ

ここに、アシナヅチ（クシナダヒメのパパ）を召して、「汝は わが宮の長（おびと）となれ」と仰せになり、また、名を与えて稲田の宮主（スガノヤツミミ）とお付けになった。

◎スサノオとクシナダヒメが結ばれ、子が生まれる。スサノオの活躍はここで終わる、次はオオクニニシの話だ、普通はこう思う。ところが、その七代目のオオクニニシ、その幼名、オホナムジがいろいろあった末に、根の堅洲国にやって来た。そこでスベリヒメと会ったとたんに結ばれる。なんとスベリヒメのパパがスサノオである。「ええ また登場ですか 久しぶりです」である。

三浦祐之著<出雲神話と出雲世界>

◎オホナムジ（オオクニヌシ）の冒険物語。オホナムジはスサノオの七代目。アシハラノシコヲ・ヤチホコ・ウツシクニタマの5つの名前を持つ。

◎オオクニヌシ：オホムナジの一代記、ヤマトタケルと共に英雄の世界が書かれている。

◎オホナムジはスサノオの6世孫（七代目）だが、スサノオの根の堅洲国で、スサノオの娘、スセリビメと結ばれる。今風にいえば、江戸時代のオレの祖先が生きていて、その娘と結ばれる、という不思議な話。

◎オホナムジは冒険の末にオオクニヌシとなって地上を統治するが、そのようにしてできあがった地上世界を眺めていた高天が原のアマテラスは、「地上はなんてすばらしい世界だ これは自分の子どもが支配するべきところだ」といいだし、次々遠征軍を派遣して地上を奪ってしまう、という国譲りの神話である。

◎このオオクニヌシには、兄君と弟君をあわせると八十あまりの神々がいて、互いに競い合っていたが、みな、国はオオクニヌシにお譲り申した。その譲ったわけというのは、…その生太刀と生弓矢とをもって、八十の神々を追い払い遠ざけ坂の尾根ごとに追いつめ、河の瀬ごとに追ひ払うて、はじめて国を作りたもうた。

◎オホナムジという少年は、稲羽のシロウサギ、八十神、根の堅洲の国のスサノオからさまざまな試練を与えられる。それを克服したのち、スサノオの祝福を受けてオオクニヌシ（立派な国の主）となって地上を治める。

◎稲羽のシロウサギ：巫医（メディカルシャーマン）古代の王はシャーマンと医者兼ね備えている。

◎八十の神々が、出雲の国から東に行った稲羽の国のヤガミヒメに求婚に行ったが、彼女が選んだのはオホムナジだった。怒った八十の神々たちが、オホムナジを殺そうと様々な妨害を企てる。山の上から猪だと偽って真っ赤に焼いた石を転がしオホムナジに抱き取らせて焼き殺した。次に大木の割れ目に追い入れて挟み殺した。その危機にいずれも母神があらわれ、高天が原に援助を要請してオホムナジを蘇生させる。

◎オホムナジは死んでしもうた。そのことを聞いたオホムナジの母神は、殺されたわが子を見て嘆き悲しんで、すぐさま高天が原に飛び昇って行って、カムムスヒにお願いした。するとカムムスヒはすぐにキサガヒヒメとウムギヒメとを遣わして、オホナムジを作り生かさせてくれた。いかに作り生かしたかというとの、キサガヒヒメが、焼けた石にへばり付くごとくに死んでおったオホナムヂの骸を、貝の殻でもって少しづつ岩から剥がしての、ウムギヒメが、それを待ち受けて、母神の乳の汁に薬を混ぜあわせて、ひどく焼けただれたオホナムヂの体にくまなく塗ったのじゃ。すると間もなく、オホナムヂはうるわしい男に戻って生きかえっての、もとの通りに出歩いて遊びまわったのじゃった。この時は少年。

◎身を案じた母神によって、オホナムヂは、出雲から熊野に逃れ、なお追ってきた八十の神々を避けて、木の俣を抜けて、地下の根の堅洲の国に向かう。

◎訪れた根の堅洲の国にはスサノオが居て、そこでオホナムヂは蛇や蜂や百足のいる部屋に寝かされたり、野に放たれた矢を取りに行つて火責めにされたりなど、またもや様々な試練を課せられます。ところがその危機は、スサノオの娘スセリビメやネズミたちの援助によって回避されます。この神話は少年が大人になるための課せられた試練、習俗としての成人式の通過儀礼を背景に持って語られる。根の堅洲国では援助者が前半の母神ではなくスセリビメと語られ、オホナムヂがその女神と結婚する。少年から一人前の男に成長したことを意味しています。

◎スサノオが眠っている隙に、オホナムヂはスセリビメと根の堅洲の国の呪宝とを奪って逃走する。

◎お前の持っている生太刀と生弓矢とをもって、八十の神々たちをやっつけろ。

◎わが娘スセリビメを正妻として、葦原中つ国を治め、オオクニヌシとなれ。

- ◎摂津峡を歩いている。昼飯を喰って自転車で下の口まで、そこで自転車を置いて歩きだした。今の季節のここは、子どもたちの川遊びの場所、遊び道具をもった親子連れがぼちぼち帰ってくるのに行き違う。下の方左側に流れがある、子どもの声、母親の声が山に響く。
- ◎今日は試運転、足の試運転、登山靴の試運転。左足の外反母趾を靴づれで痛めて一月半、まだ多少腫れが残っているかと思うが、日々の安威川はこなしている。大きい靴、ぶかぶかの靴なら時間が長くても違和感が少ない。小さいザックに予備の靴とサンドイッチと水をもって歩いている。
- ◎登山靴は二つある。3年ぐらい前の3万円で買ったシリオの登山靴、まだまだ新品だと思っていたが何度も履いているので靴底が少しへたってきている、これだけ重宝に使うならお買い得だと慰めながらも靴ひもを緩めて履いている。この靴で、3.4時間、山道を行動できれば試運転通過だ。
- ◎今年は早々と梅雨明け宣言が出て、35度ぐらいの日々が何日かあった。急に暑くなって身体がだるい、しんどい、まいったな、と思っていたら台風が来てそれ以来雨の日が多い。梅雨の雨というより集中豪雨型の雨、住まいの近所は豪雨は無いが、洪水のニュースも流れている。おかげで涼しい、30度少しの日々が続いているのはありがたいが、これから猛暑の夏がやってくると思うと気が重い。
- ◎摂津峡を抜けたあたりに看板がる、芥川城が上にあるという。何度もこのあたりは通過しているが、試運転の今日こそ山城を探検してみようと進んだ。200Mの小さい山なれど人家がまわりにあって踏み跡や元林道やで地図と磁石が無いと迷ってしまう。
- ◎ほ～ ほけきよ けきよけきよけきよ きよきよきよ おお上手く鳴くじゃないの、左のすぐそばで声だけ聞こえる。あれれ、スズメバチのぶんぶん、おお、でかい奴、イエローディーブ：濃い黄色に黒のまだら、頭をかすめて飛んでいく。
- ◎後ろから足音、振り返るとあんちゃんが一人、どうぞと道を譲ったが、てっぺんまで二人で話しながら登った。みずき君は21歳の大学生、経済関係の学部らしい、来年には東京に就職が決まっているとか、185cmぐらいのでっかい青年である。「歴史が好きで 三好長慶の芥川城が見たくて・・・」無知なオレ、看板を見ながらも、「三好長慶」「芥川城」これらの固有名詞がかすんでいた。「歴史の狭間 傑物がいない時代の この時代に興味がある人物なので・・・」「ふ～ん」
- ◎帰って早速調べてみた。43歳で亡くなっているが近畿を平定し国政を行った最初の天下人、だったとは・・・
- ◎高槻市：芥川山城は、北・西・南の山裾を芥川がめぐる天然の要害・三好山182mに築かれた戦国時代の山城です。摂津・丹波の守護・細川高国によって、1516年に築城されました。三好長慶が1553年に入城。天下人との評価を受けるに至ります。長慶没後の1568年織田信長の軍勢に三好一族は城を追われ、高山飛騨守・右近父子が城を預かりますが、やがて芥川山城は廃されました。最大で東西約500m×南北約400mに広がる地域には、最高所に主郭を配し、幾重もの曲輪と土塁・堀切などの防御施設が設けられました。現在でも、城跡を歩くと堅土塁や土橋、虎口、石垣などの遺構を見ることができます。
- ◎生れは徳島県阿波の人。細川家の家臣。下剋上によって主君細川春元を追い払い天下人になった。三好長慶、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康と天下人が続く。おお知らなかった。この山の名も三好山という。
- ◎三好山てっぺんにやって来た、おお、まる見え、高槻が、茨木が、生駒の山々が、大阪の高層ビルが、関空のひよろりビルも見える。ポワリ霞んでいるがここからは大阪がまる見え、戦国武将にとってはまさに要衝だね。ここに山城を築き下を眺め人の気配を眺めるのは戦略的にすごい。このちっぽけな山が三好山というのも納得。
- ◎てっぺんでみずき君と別れ、塚脇の方に下った。降りてすぐのところに城の石垣らしきものの跡、こんな石垣まで造ったとはなかなかいいものを見つけた。
- ◎延べ3時間ほどうろろうろしたが、足は大丈夫、試運転は終わりこれで山はいけると確信、さあこれから山に登ろう、計画しなくては、まずは比良に行きたいねえ・・・。

三浦祐之著<出雲神話と出雲世界>

◎私事ながら：もう何年ぶりだろう、本を買った。<口語訳古事記：完全版：三浦祐之著>この本を図書館で借りているが、「この本は持っておきたい そばに置いておきたい」ということでネットで調べ、送込みで1100円<定価 3300円>でゲットした。まだ包装を解いていない。

◎ヌナガハヒメと翡翠：古代の神話や伝承で、神や天皇が他の女性に求婚するという話が多いが、その背後にはその土地の領有という政治的な意味が込められているのが普通である。この場合も、高志の国を象徴する女神を手に入れることによって、この土地を所有することを語っている。稲羽の国のヤガミヒメの求婚の場合と同じである。1950年代におこなわれた発掘調査によって糸魚川周辺が、古代の東アジアの硬玉翡翠の唯一の産出場所であったと判明した。ヌナガハの石玉が、硬玉翡翠を指しているということが判明したのも、発掘調査以降であった。

◎翡翠メモ：ヒスイには硬玉（ジェダイト）と軟玉（ネフライト）の2種がある。糸魚川産は硬玉翡翠で硬く高価で宝石として使用される。

◎万葉集：作者不詳

淳名河の 底なる玉 求めて得まし 玉かも 拾ひて 得まし玉かも あたらしき君が 老ゆらくをしも

◎縄文時代の翡翠製品は、勾玉などの装飾用品、ヒスイに穴をあけ紐を通して身体に付けたようだ。硬玉翡翠は硬度が7だという。ダイヤモンドを削る時にダイヤモンドのクズで削るらしいが、1万年前に翡翠を磨き、穴を開ける技術、根気よく時間ををかけて削る技術を見ると気が遠くなる努力だと感心。

◎ヤチホコは翡翠を手に入れるための遠征であった。翡翠には大きな力があり、贈答の品として各地を巡り歩いた。日本海を道とする人々が深く関与していた。

◎ヤチホコ：オオクニヌシのこと：立派な矛をもつ武人というより立派なホコをもつ色ごとに長けた神・・・。

長編歌謡が伝えられる。乞食者：ほかひびと：芸能者によって伝えられたもののか。

◎このヤチホコ、高志の国ヌナガハヒメをよばはむとして、いでましし時、そのヌナガハヒメの家に至りて・・・。

ヌナガハヒメの艶っぽい歌を紙面の関係で間引いて・・・。

やちほこの 神のみこと

ヤチホコの神様

ぬえくさの めにしあれば

なよやかな草のような女ですから

わが心 うすらの鳥ぞ

わたしの心は 入り江の鳥

いまこそは わどりにあらめ

今は 我が家の鳥ですが

のちは などりにあらむ

のちに あなたの鳥になりますものを

いのちは なしせたまひそ

鳥の命を 死なせないで

いしたふや あまはせづかひ

使い走りのものが 伝え聞く

ことの かたりごとも これをば

ことの語り伝えは かようでございます

あおやまに ひかくらば

青い山に日が隠れたら

ぬばたまの 夜はいでなむ

夜になったら

あさひの えみさかえきて

朝日のような笑みを浮かべておいでになり

たくづのの しろきただむき

わたしの白い腕や

あわゆきの わかやるむねを

淡雪のような胸を

そだたき たたきまながり

優しく撫でて 愛おしんで

またまで たまでさしまき

玉のような美しい手で手枕をして

ももながに いはなさむを

足を延ばして あなたはお休みになれましよう

三浦祐之著<出雲神話と出雲世界>

◎先生弁：七世紀以前の王権に向き合いながら世界を語ろうとする古事記にとって、出雲という世界は強大な対立者として存在しました。そしてその出雲を倒すことによってヤマトの王権は成立したのだということを語るために、古事記では、オホクニヌシを中心とした出雲の神々の物語が必要だったのです。出雲は大和朝廷にとって、しばしば恐るべき世界、強大な対立者として認識されていた。

◎八世紀初頭、大和朝廷の官僚であった太安万侶の古事記に關与した時代には考えられなかった世界が、そこには語られていたはずです。日本書記のように八世紀的な歴史認識によって統御できるだけの能力は太安万侶は持ってなかった。というより現在に伝わる古事記には、太安万侶の手はほとんど入っていないとみるほうがよさそう。

◎正妻のスセリビメはあまりに嫉妬深いのでヤチホコも困り果てていた。もっとも立派な矛をもったヤチホコがそれこそあちらこちらにいい女を探し、いい男ぶるものだから・・・嫉妬深い妻に嫌気がさし、黒・青・茜と派手な色の着物に着替えながら、あの華やかなヤマト（倭）に行ってしまうぞと、スセリビメに揺さぶりをかける歌。ほんとは引き留めて欲しい、その続きが前回の艶っぽい歌でした。古事記の出雲神話で、ヤマトが出てくるのはここと、三輪山に神を祀るという話。ヤマトが力をつけて出雲を圧倒しようとする時代を彷彿とさせる。

まつぶさに 取りよそひ	すきもなく 粹に着こなし
おきつとり むな見るとき	羽繕いする海鳥よろしく 胸元みれば
はたたぎも これはふさはず	着心地確かめ これは似合わず
へつなみ そにぬきうて	後ろの波間に ぼいと脱ぎ捨て
そにどりの あをきみけしを	カワセミの 青い衣に
まつぶさに 取りよそひ	すきもなく 粹に着こなし
おきつとり むな見るとき	羽繕いする海鳥よろしく 胸元みれば
はたたぎも こもふさはず	着心地確かめ これは似合わず
へつなみ そにぬきうて	後ろの波間に ぼいと脱ぎ捨て
山がたに まきしあかねつき	山の畑に 蒔いた茜を臼で挽き
そめ木が するにしめころもを	染める木の 汁にて染めた染めの衣を
まつぶさに 取りよそひ	すきもなく 粹に着こなし
おきつとり むな見るとき	羽繕いする海鳥よろしく 胸元みれば
はたたぎも こしよろし	着心地確かめ これはお似合い
いとこやの いものみこと	愛しいやつよ 我が妹よ
むらとりの わがむれいなば	群れ鳥の われが皆と旅立ったなら
ひけとりの わがひけいなば	引き鳥の われが背を引き連れ行けば
泣かじとは なはいふとも	泣きはしないと お前は言うが
やまとの ひととすすき	山の麓の 一本ススキ
うなかぶし なが泣かさまく	首をうなだれ お前が泣くさま
あさあめの きりに立たむぞ	朝降る雨が 霧に立つごとと涙でぐしより
わかくさの つまのみこと	萌え出た草が 若くしなやかな妻よ
ことの 語りごとも こをば	・・・お語りいたすは かくのごとくに

- ◎簡単トレイル<trail:自然散策コース>に行きませんか、という誘いを受け、朝の7:30 茨木斎場付近に自転車で行った。番匠・林・岡村の3人で安威川左岸を川上のほうに歩き始めた。このお二人はマラソンやトレイルがお好きで、しょっちゅうどこかを走り、歩いておられる。最近では山に登っていても走って上り下りをする方々が増えてきている。皆さん、「〇〇山 〇〇キロを 〇〇時間で 行って来た」という。距離はおそらく地図上の距離だと思うが、オレの登山感覚とは違う。山に入って、自然を楽しんで、無事帰りたい。山岳会じゃあるまいし、時間や技術を競ってなんとする、山は競争じゃないよなあ。
- ◎高速道路をくぐり耳原中学の横、まもなく二俣の遊歩道の折り返し点。50歳代のころ、ずっとここを走っていた。そのころは元気で10キロを1時間で走っていた。耳原中学の下にあるベンチでストレッチをしていた。ただ当時はまだまだ酒を毎日のように飲んでいて、1杯2杯3杯と飲んでいて。酒を飲みすぎると体力がなくなる、あくる日がシンドイ、途中で走れなくなると自覚したすのは60歳代を過ぎてからだった。
- ◎今日は阿武山から萩谷方面に行くと思っていた。阿武山の登り口はどこだったかな、と信号の先に看板があり、阿武山に登る階段があった。小学校時代、学校行事でこのあたりの川で泳いだのを覚えている。校長やらクラス先生やらが川の深みに連れて行ってくれた。今見ても多分あそこで泳いだのだろうという深みと石が見える、かつて使っていた橋も壊されずに下の方、蔦に半分からまってある。昔、通っていた小学校も田んぼの真ん中だったが、安威も田舎だったんだ。何を隠そう、阪急茨木駅も、一重に建物が困っていたが、その外側は田んぼだった。
- ◎阿武山は40歳代に来たはずだけれど、全く忘れていた。阿武山281Mを過ぎて林道を行くと変電所にぶつかった。右に折れ、車道をしばらくして左に折れる。東海度自然歩道：摂津峡：の看板がある。「車道はいやだよ自然道がいい」わがままをいいつつ、摂津峡に向かって川のそばの道を歩く。お二人は富田駅から電車で帰るので、「オレ 摂津峡から今来た道を帰りたい もうちょっと歩きたい 自然道がいい」と別れた。
- ◎滝のあるところ、「あれれ ここは知ってるぞ それこそ40歳代かな」熟年夫婦に連れられた柴犬が寄って来た。柴犬はよその人のところには寄ってこない、吠え威嚇するだけと思っていたが、珍しいね、寄ってきた。両手で顔をなげると、ぺろぺろしてきた、嬉しいじゃないかな、会ったばかりの犬にぺろぺろされるなんて…。
- ◎北大阪変電所と看板に書いてある。このあたりの山は送電用の鉄塔がいくつもあり、鉄塔整備用の山道がある。国土地理院の地図にも電線が載っているので、迷うということではなかなか頼りになる。変電所のことをじっくり眺めたことはないが、あらためて見ていると、何本もの鉄塔から電線が降りてきて、大きな函の中を通過して、次の鉄塔につながっていくようだ。大きな函の中の構造はどうなっているのか知らないが、変電設備とは単純な設備のようだ。函の中で何万とか何千とかの数字が変換されているのかな。
- ◎電気の話：昨今、世界的に電気不足が騒がれている、日本もこの夏に電力が足りないとニュースが出ていた。「原子力発電を再開すれば済む話だ」と簡単にのたまう方と、「原子力発電は絶対反対」とのたまう方、意見はあるようだが、「それじゃ こうすればいいのでは」という意見がない、あるのかもしれないが聞こえてこない。我がアトリエもついに37度の日がやって来た、扇風機を回したところで暑い風の乱舞だけ、ひやりとしたものが欲しいが、我がアトリエは大きすぎて簡単にはヒヤリが得られない。
- ◎ほ～ きよきよきよ まだ下手だねえ、もうちょっと練習してくださいよ。地面にオオスズメバチが転がっている。これはデカイ、女性の小指ぐらいの大きさ、これに刺されると痛いだろうね。
- ◎登山口に降りる道から、ちょっと寄り道したところに、阿武山古墳がある。「貴人の墓」と書かれている。オレの少年時代には今の住まいからこの、「阿武山地震研究所」の白い建物がくっきり見えていた。その当時からもこの施設は使用されていないと聞いていた。そのそばから石棺が出て、骨を見つけた人たちが写真を写し、慌て埋め戻したという有名な話。年を経てその写真を細かく分析すると、藤原鎌足らしき人物がにっこり微笑んでいたとか。
- ◎炎天下、安威川河川敷を歩き、3時に帰り着いた。水シャワーでひといきなり。

三浦祐之著<出雲神話と出雲世界>

◎出雲神話の最後の方に、国造りを語る話が二つ置かれている。

◎スクナビコチ：さて、オオクニヌシが出雲の美保の岬にいました時、波の穂を、天の羅摩船（かがみぶね）に乗って、蛾（ひむし）の皮をそっくり剥いで衣にしてより来る神があった。

そこでその名を問うたが答えがない。またお伴の神たちに問うても、「知りません」と申し上げる。その中で、クニグクが申し上げて、「この方のことは クエビコが キッと知っている」というので、すぐさまクエビコを召しだし問うと、答えて、「このかたは カムムスヒの御子 スクナビコチである」という。

さてそこで、カムムスヒに申し上げると、お答えになることには、「この子は まことに我が子です 子どもたちの中で 我が手の俣から漏れてしまった子です どうか あなたアシハラノシコヲよ 兄と弟になりてその国を作り固めなさい」と仰せになった。

そこでそれから、オオナムチとスクナビコチの二柱の神は、ともに並んで力を合わせ、この国を作り固めたのだが、そのあと、このスクナビコチは、常世の国に渡っていった。

◎海のかなたからやって来た神はカガミで作った船<ガガイモの豆のさやを二つに割ると船のようになる>に乗り、ヒムシの皮<蛾の姿のぬいぐるみ>を着てやってきた。

◎先生：蛾のぬいぐるみを着た小さい神、みつばちマーヤの主人公のようではないか・・・

◎クエビコ：案山子の神：山田のソホドというのじゃ。この神は足を歩ませることができぬが、何から何までこの世のことをお見通しの神なのじゃ。

◎クニグク：ヒキガエル：谷の奥でグクグク鳴く。二つとも面妖な神が出てくるところが、出雲神話らしい。

◎この話では、オオクニヌシではなく、オオナムチとして語られる。出雲風土記や播磨風土記や万葉集でも、オオナムチとスクナビコチのコンビとして語られているからだ。

◎三輪山の神。

◎相棒スクナビコチが常世の国に行ってしまうと、いなくなり、オオクニヌシは国作りが滞って嘆いていた。

◎するとその時、海を輝き渡らせてより来る神があって、その神が仰せになるには、「わが前を よく治め祀ったならば、われが汝と共によく国を作りなそう もしそれができないならば 国は成りがたいであろう」ということじゃった。

そこでオオクニヌシが尋ねて、「それならば あなた様を治め祀る状（さま）は いかによろしいのでしょうか」というと、その神は答えて、「われは 倭の青々とした山垣の 東の方の山の上に 祝い齋き祀ればよい」と答えたのじゃった。それでお祀りしたのが、今も御諸山の頂に座する神である。

◎山に囲まれた盆地の中の東の方のミモロ山というのは三輪山のことと見ていい。名もなき三輪山の神が出雲の話にでてくる。出雲にヤマトが近づいてきたのかな・・・それと、我が住まいの近所、溝咋神社の名前が出てくる不思議・・・

◎出雲のオオクニヌシは、ヤマトの天皇にどンドンすり寄っていくように見えるのだが、古事記の語られている三輪山への神の鎮座神話を読む限り、そうした気配は全く認められない。ただヤマトの三輪山に行きたいという神を、ヤマトに送ったというだけだが、このあたりの出雲とヤマトの関係は、とうてい一筋縄ではいきそうにない。

◎茨木の溝咋神社の話：初代天皇：神武の状で、イハレビコ（神武）の後となったイスケヨリヒメ。

美和のオオモノヌシが 三島溝咋のむすめ、セヤダタラヒメと交わって生まれた子が神武の後だという。